



# 御代の刀のよような鞘橋

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館  
**江口知秀**  
Tomohide Eguchi

つたらしいが、まさか橋上の市場のために屋根がつけられたわけではあるまい。  
諏訪大社下社春宮の下馬橋、宇佐神宮の呉橋のように神域への入口とみなされる橋には立派な屋根がつけられている例がある。鞘橋も金刀比羅宮参道前の一の橋としての権威と、聖と俗との境界を顕示するために屋根付橋が建てられ、出店はそれを都合よく利用したと考えるべきだろう。(つづく)

みせた同行者は積極的で、「見よう見よう」と参道入口とは逆方向にもかかわらず、鞘橋へとぐんぐん歩いていく。

鞘橋は寛永元(一六二四)年または元和七(一六二一)年に架けられたという説がある。いつ頃から屋根つきになったかわからないが、江戸時代に描かれた絵にはすでに屋根がついている。弥次・喜多コソビの珍道中シリーズ『金比羅参詣 続膝栗毛』でも、「上を覆ふ屋形の鞘におさまれる御代の刀のやうな反橋」と詠まれており、橋桁を刀に、屋根を鞘に見立てて、鞘橋と名づけられたことがわかる。

江戸時代の鞘橋には橋脚があったが、明治二(一八六九)年に架け替えられて現在のよような橋脚のない橋となった。形式は今風に言えば、スパンドレルブレースドアーチとか。長さ約二三・八メートル、幅約四・五メートル。また、場所についても、長い石段へと続く参道前に架けられていたが、明治三十七(一九〇四)年に現在の位置へ架け替えられた。

さて、『金比羅参詣 続膝栗毛』には、「上に屋形ありていとめざらしき橋なり」とも書かれているが、頻繁に取材旅行に出かけた十返舎一九でも屋根付橋は珍しかったようだ。鞘橋の場合、むかしは橋の上で鮮魚、野菜、小道具などの店がたち、大いに賑わ

**丸** 亀街道を歩いて金刀比羅宮のお膝元まできたものの、疲れ果てた同行者はホテルのベットに横たわってピクリともしない。それでも「門前町にある丸亀名物骨付鳥を食わせる店までがんばってみようじゃないか」と励ますと、むつくらと起き上がり、のそのそ歩き出した。

外に出ると、日は落ちかけているがまだ明るく、外気は至ってさわやかだ。その心地良さに涙がおちたのか、同行者が意外な提案をした。「このまま金比羅さんについてみるか」。

あんなに疲弊していたのに驚きだ。金刀比羅宮は象頭山の山腹にあり、本宮までは約八〇〇段、その上の奥社に至ってはさらに約六〇〇段も石段を登らなければならない。登りは大嫌いのくせに、金比羅さんに魅入られたのではなからうか。同行者の足取りは軽く、すぐに金刀比羅宮と俗界を隔てるように参道前を流れる金倉川に架かる橋に差しかけた。金倉川は、あの満濃池より流れ出る川で、明日はこの川に沿って満濃池へと向かう。七、八キロといったところだろうか。うまい具合にホテルで自転車借りられそうなので、サイクリングにはちょうど良い。橋を渡りながら上流を眺めると、屋根がついた木橋がある。あれが有名な鞘橋だ。不気味な回復力を



鞘橋

[交通] 琴電琴平駅、JR琴平駅より徒歩約10分